

【現代語訳】

ぼんやりと、ほのかにかすんだ月が見える頃は、
篝火を焚いて白魚を捕る春になったんだなあ。

一寸風は冷たいけれど、ほろ酔い気味のオレには気持ちが良い。

あれえ、廓に浮かれてしまったような馬鹿なカラスが

今頃、一羽で飛んでるぞ。

オレも寢座に帰る途中だが、川端で穢れを被ってくれたのか、

浅瀬にさす舟の棹に、袖を濡らすように、

濡れた手で粟を掴んだぞ。 何だ？ (舞台の向こうから)

「あなたの厄払いをしますよ」 って、

厄落としの呼び声が聞こえて来たぞ。

ああ、今夜はもう節分の日か。

だから「厄払い」のクソ坊主がうるせえのか。

エへ、オレが掴んだ粟は、百両の大金だ。

こいつは、春になって縁起が良いことになったなあ。

令和四年四月七日

大中臣正比呂 拙訳

